

研究報告

周産期における母親の内的ワーキングモデルと 胎児および乳児への愛着

大村典子*¹, 山磨康子*², 松原まなみ*²

Mother's Internal Working Models and Perinatal Attachment

Noriko Ohmura *¹, Yasuko Yamatogi *², Manami Matsubara *²

*¹ Shimane Medical University School of Nursing

*² Okayama Prefectural University Faculty of Health and Welfare Sciences

キーワード：胎児への愛着，乳児への愛着，愛着体験，内的ワーキングモデル

Key words : prenatal attachment, postnatal attachment, attachment experience, internal working models

Abstract

The aim of this study was to investigate the features of perinatal attachment according to each type of internal working models, for determine whether a relation exists between the mother's internal working models (IWMs) and perinatal attachment by using the Müller's attachment model.

A prospective study was performed with data collected during the third trimester of pregnancy and 1 month after delivery, and the following results were obtained.

- 1) There was a modest correlation between prenatal and postnatal attachment.
- 2) Mother's internal working models are classified into 3 types : Secure, Ambivalent and Avoidant. The prenatal attachment score of the secure type mother was significantly higher.
- 3) In the secure type mother, there was a strong correlation between prenatal and postnatal attachment. In ambivalent and avoidant type mothers, the correlation between prenatal and postnatal attachment was weak.

The results demonstrated a relation between the mother's internal working models and perinatal attachment in Müller's model. IWMs is one of the key concepts in assessing the subject of intergenerational transmission of attachment, IWMs must be considered not only postnatally but in the prenatal period as well.

要 旨

この研究の目的は、Mullerの愛着モデルを用いて、母親の内的ワーキングモデルと児への愛着との関連を検討するために、母親の内的ワーキングモデルをタイプ分けし、各タイプ別

*¹ 島根医科大学医学部看護学科

*² 岡山県立大学保健福祉学部

に胎児および乳児への愛着を検討することである。

妊娠後期から産後1ヶ月の母親を対象とした短期縦断調査を行った結果、

- 1) 妊娠後期の胎児愛着得点と乳児愛着得点との間に中等度の相関が認められた。
- 2) 母親の内的ワーキングモデルを安定型、不安定型、回避型の3タイプに分類すると、安定型の母親は他タイプの母親に比べ胎児への愛着得点が有意に高かった。
- 3) 安定型の母親は胎児愛着得点と乳児愛着得点との間に強い相関が認められた。不安定型、回避型の母親の胎児愛着得点と乳児愛着得点の相関は低かった。

以上の結果より、Müllerの愛着モデルに関し、母親の内的ワーキングモデルと胎児および乳児への愛着との間に関連があることが証明された。内的ワーキングモデルは、愛着の世代間伝達の問題を考えていくうえで重要な概念の一つであるが、これは出産後のみならず妊娠期から考慮すべき概念であると考えられる。

はじめに

近年、育児不安や愛情遮断症候群など母子関係をめぐる心理的、社会的問題が浮上してきている。このような親子関係の背景に、母親自身が幼少期に自分の母親あるいは適切な養育者から十分な愛情を得ていない、いわゆる情緒の世代間伝達の問題が指摘されている(Dodge, 1990; 田野, 1996)。しかしこれらの報告はいずれも回顧的な調査であり、一概に結論づけることはできない。また、世代間伝達の問題は過去に愛着に関する外傷体験があるかないかよりも、過去の愛着体験を現在母親がどのように統合し、認知しているかということが重要であり、その点が次世代の子どもとの愛着パターンに大きな影響を与えることも指摘されている(Main, 1985)。これらの指摘をふまえ、母親自身の幼少期における愛着体験と周産期における我が子への愛着との関連を前方視的に検討するためには、内的ワーキングモデルの概念をとりあげることが有用であると考えた。

本研究の目的は、Müllerの愛着モデルを用いて、母親の内的ワーキングモデルと児への愛着との関連を検討するために、母親の内的ワーキングモデルをタイプ分けし、各タイプ別に胎児および乳児への愛着を検討することである。

I. 概念枠組

内的ワーキングモデルとはBowlby(1973)が愛

着理論の中で唱えた仮説である。彼は、親(養育者)と安定した愛着関係にある子どもは、自分を愛し応答してくれる親だという親についての内的ワーキングモデル(心的表象)と、自分は人から養護され支えられるに値する人間だという自分自身についての内的ワーキングモデルを形成する。反対に不安定な愛着関係にある子どもは、愛してくれず応答的でない親、そして自分は親に養護され支えられるに値しない人間という内的ワーキングモデルを持つ。このようなモデルは我々の心の中に留められ、新しい対人情報を解釈する際のガイド役として無意識に働く。そしてその後人間関係に適用され、さらに自分が親になったときにも呼び起こされて、子どもとの相互作用過程に影響を与えると推論した。一般にBowlbyの理論は乳幼児の愛着行動に焦点が当てられる。しかし戸田(1991)は、彼の理論は単に乳幼児と母親の関係性の問題だけではなく、愛着関係の中で何が個人に内在化され、それが生涯発達のなかでどのように個人の認知や行動を特徴づけるかという点が重要であり、愛着の問題を乳幼児から切り離し、全生涯に渡るパーソナリティの発達理論として捉え直す必要があることを指摘している。Bowlbyによる内的ワーキングモデルの概念は、人生早期の母子関係によって形成されたものであるが、それは実際のでき事そのものの写しではなく、過去の体験をいかに意味づけ記憶構造の中に組み込んだかを反映するものである。

Müller(1993)はBowlbyの理論を基に妊娠期

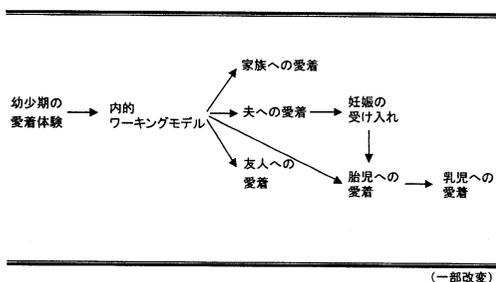


図1 愛着モデル (Muller 1993)

の愛着モデルを提案した(図1)。このモデルは胎児への愛着もまた、妊婦自身の幼少期の愛着体験が内的ワーキングモデルとなり、それが家族や友人そして夫への愛着、さらに妊娠の受け入れと胎児への愛着へつながることを示している。母親の内的ワーキングモデルと乳児が形成する愛着行動パターンには一定の関連があることが報告されている(Main et al, 1985 ; Fonagy et al, 1991)。しかし妊娠期の母親に関し、内的ワーキングモデルと胎児への愛着さらに乳児への愛着との関連についてはまだ報告がなされていない。Mercer(1993)は、今後、母子関係を研究するうえで、Müllerが愛着モデルで指摘したような表象化された母親自身の幼少期の愛着体験を考慮する必要性を述べている。またRubin(1984)も、子ども時代の幸せおよび性格の特徴が母親になろうとしている女性の拠りどころやモデルとしてより大きな意味をもつとのべ、幼少期における実の母親との関係が、妊娠期の女性の母性性形成に重要な役割を果たすことを指摘している。本稿では、周産期の愛着を「母親と胎児および乳児との間に発達し、時がたっても永続するかけがえのない愛情ある関係」(Müller, 1993, 1994)。内的ワーキングモデルを「愛着対象との持続的な相互交渉を通して人の内部に形成される愛着対象および自己に関する心的表象」(戸田, 1991)と定義し、母親の内的ワーキングモデルと児への愛着との関連を検討する。

II. 研究方法

1. 調査方法

妊娠後期から産後1ヶ月の母親を対象に質問

紙を用いた短期縦断調査を行なった。調査は倉敷市内S病院の産科外来で、1999年6月～同年9月に行った。妊婦健康診査に訪れた対象者に、筆者が研究目的を説明し同意を得た。質問紙は無記名としたが、産前・産後のデータを照合するために、対象者自身にID番号を記入してもらった。妊娠期にはPrenatal Attachment Inventory日本語版と内的ワーキングモデル尺度および人口統計学的シートを配布した。

産後は1ヶ月健診の場で筆者が質問紙を手渡した。用いた質問紙はMaternal Attachment Inventory日本語版、および人口統計学的シートである。

2. 調査対象

妊娠期は、母児ともに健康な妊娠28週以降の単胎妊婦を対象とし、118名に調査を依頼し116名より回答が得られた。このうち不妊治療によって妊娠した妊婦を除き85名を分析対象とした。産後は産褥1ヶ月の健診に訪れた健康な褥婦を対象とし77名に調査を依頼した。分娩様式は経膈分娩と帝王切開分娩であるが、帝王切開のうち不測の事態により緊急手術となった事例は除外した。新生児側の条件としては、出生時アプガールスコア8点以上、正期産でAFD児(Appropriate for date infant)であること、また生後1ヶ月の乳児健診で順調に発育していると診断された児の母親とした。産後の有効回答74名のうち妊娠期のデータとマッチするものは53名であった。

3. 測定用具

1) 胎児への愛着

Müller(1993)の開発したPrenatal Attachment Inventoryを本人の許可を得、日本語に翻訳した(以下PAI-J)。この尺度は21項目、4段階のリケートスコアであり、得点が高いほど、胎児への愛着が高いことを示す。小児科学、母子保健看護学の専門家、女性米国人英語講師らと内容妥当性の検討を行なった。また本調査と同施設で健康な妊婦を対象とした予備調査においてMFAS日本語版(成田, 1993)との間に高い相関($\gamma = 0.856$, $n = 57$)が認められ、併存妥当性が証明された。信頼性係数はCronbach's $\alpha = 0.89$

であった。Müllerの調査(1993)では、PAIとMFAS(Cranley 1981)の相関は $\gamma = 0.72$ ($n = 310$)、信頼性係数はCronbach's $\alpha = 0.81$ であり、翻訳後も内的整合性は保たれていると判断した。具体的には「赤ちゃんの動き(胎動)を感じるのはうれしいです」「赤ちゃんのことを考えているととてもワクワクします」などである。

2) 乳児への愛着

Maternal Attachment Inventory(Müller 1994)をPAI-Jと同様、翻訳し使用した(以下MAI-J)。この尺度は26項目、4段階のリケートスコアである。産後1ヶ月の健康な母親を対象とした予備調査で、子ども用愛着尺度(大日向1988)との間に相関($\gamma = 0.469$, $n = 32$)があり、予測的妥当性が認められた。MAI-Jの信頼性係数はCronbach's $\alpha = 0.932$ であった。具体的には「私は赤ちゃんを愛おしく思います」「赤ちゃんの様子を見ていると赤ちゃんが何を欲しているかわかります」などである。

3) 内的ワーキングモデル

託摩・戸田(1988)の開発した内的ワーキングモデル尺度を用いた。この尺度はHazan & Shaver(1987)による成人版愛着スタイル尺度を3種類の内的ワーキングモデルが特性的に測定できるように改良したものであり、安定、不安定、回避の3つのサブスケールが仮定された、22項目、6点のリケートスコアである。妊婦健診に訪れた妊娠28週以降の母児共に健康な妊婦38名を対象として行った予備調査での各サブスケールの信頼性はCronbach's $\alpha = 0.705$ (安定項目)、0.781(不安定項目)、0.806(回避項目)であった。

4. 分析方法

統計パッケージSPSS9.0Jを用いた。母親の属性別にみた愛着得点の平均値の差の検定にはt検定、内的ワーキングモデルのタイプ間での愛着得点の平均値の差の検定には分散分析を用いた。胎児愛着得点と乳児愛着得点の関連については、ピアソンの積率相関係数を求めた。

内的ワーキングモデルは各サブスケール得点を一側面ごとに検討するよりも、個人内に安定、

不安定、回避の3側面が同時に存在しているものと考えの方が实际的である(戸田1991)。つまり3種類の内的ワーキングモデルのうち個人内における最も優位な側面を知り、その側面と児への愛着との関連を検討することが必要であると考えタイプ分けを行った。タイプ分けの分類カテゴリーは、これまで安定型(自立型)、不安定型(抑圧型)、回避型(没頭型)という3タイプに分類する方法がとられてきた。これはストレンジシチュエーション法(Ainsworth 1978)で乳幼児の愛着行動を測定した際の分類パターンに対応している。この点については、乳幼児期のアタッチメントが「鋳型」のように固定化し、かわらないままの構造で青年期以降の内的ワーキングモデルとして機能しているかのような印象を与えやすい(戸田1991)、という指摘もある。しかしBowlby(1980)やBretherton(1985)は、一旦形成された内的ワーキングモデルは、意識の外で働き、新しい情報は現存するモデルに同化されるために、モデル自体にダイナミックな変化は起こりにくい傾向にあるという立場をとっており、それをふまえFonagy(1991)は妊娠後期の妊婦の内的ワーキングモデルを自立型(安定型)、抑圧型(不安定型)、没頭型(回避型)の3タイプに分類、Main(1985)も6歳の子どもの持つ母親の内的ワーキングモデルを同じく3タイプに分類している。今回用いた内的ワーキングモデル尺度を周産期の母親に使用された例はないが、本調査で得られた回答を変量として因子分析(直行回転、バリマックス法)を行った結果、仮定されている下位概念と同様の3因子が抽出されたため、FonagyやMainらと同様、3タイプに分類することとした。タイプ分けの方法としては、因子分析の後、それぞれの因子に対し各個人の因子得点を出力し、最も高い得点をもってタイプとした。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の背景

対象者の平均年齢は、28.72歳(SD=4.2)であった。初産婦27.30(SD=3.3)、経産婦30.00歳(SD=4.6)。調査時の妊娠週数は平均35.97週

(SD = 2.2), 産褥日数は平均36.34日 (SD = 3.7) であった。その他の属性は表1に示す。

2. 胎児および乳児への愛着

胎児愛着得点の平均値は59.79 (SD = 10.2) であった。これを初経別に比較すると、初産婦61.83 (SD = 10.4), 経産婦57.98 (SD = 9.8) であったが、統計的有意差はなかった。職業の有無

表1 対象者の背景

		人数 (%)	
		妊娠期	産後
出産歴	初産婦	40 (47.1)	24 (45.3)
	経産婦	45 (52.9)	29 (54.7)
職業	あり	22 (25.9)	12 (22.6)
	なし	63 (74.1)	41 (77.4)
分娩様式	経膈分娩	48 (88.9)	
	帝王切開	5 (11.1)	
家族形態	核家族	58 (78.4)	
	複合家族	16 (21.6)	

妊娠期 n = 85 産後 n = 53

による胎児愛着得点に有意差はなかった。

乳児愛着得点の平均値は90.28 (SD = 10.6) であった。初経別、職業の有無、分娩様式による乳児愛着得点に有意差はみられなかった。

胎児愛着得点と乳児愛着得点の間には有意な正の相関 ($\gamma = 0.684, p < 0.01$) が認められた。

3. 周産期の内的ワーキングモデル得点

内的ワーキングモデル得点の平均値は、妊娠期安定得点25.69 (SD = 4.6), 不安定得点18.75 (SD = 4.6), 回避得点20.65 (SD = 4.7) であった。各サブスケール得点を初経別、職業の有無、分娩様式、家族形態によって比較したが、有意差は認められなかった。内的ワーキングモデル尺度の因子分析の結果を表2に示す。

4. 内的ワーキングモデル得点と児への愛着得点との関連

妊娠期に行った内的ワーキングモデル尺度の各サブスケール得点と胎児および乳児愛着得点

表2 内的ワーキングモデルスケールの因子分析表

項目	第1因子	第2因子	第3因子
1. 私は知り合いが出来やすい方だ。	0.809	-0.101	-0.025
5. 私はすぐに人と親しくなる方だ。	0.858	-0.054	-0.095
7. 私は人に好かれやすい性格であると思う。	0.722	-0.084	0.060
10. たいていの人は私のことを好いてくれていると思う。	0.579	-0.188	0.077
13. 気軽に頼ったり頼られたりすることができる。	0.691	-0.138	-0.169
19. 初めて会った人とでも、うまくやっつけられる自信がある。	0.785	-0.135	0.107
2. 人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。	0.081	0.637	0.364
4. 時々友達や、本当は私を好いてくれないのではないかと心配になることがある。	-0.031	0.684	0.313
8. 自分を信用できないことがある。	0.016	0.613	-0.020
11. 自分に自信が持てない方だ。	-0.300	0.727	-0.145
17. 私はいつも人と一緒にいたがるので、時々人から疎まれてしまう。	0.276	0.526	0.191
20. ちょっとしたことでも自信をなくしてしまう。	0.180	0.770	-0.139
21. どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられるとイヤになってしまう。	-0.159	0.485	0.187
3. 人に頼るのは好きではない。	0.008	-0.165	0.680
6. 私は人に頼らなくても、自分一人で充分うまくやっつけられると思う。	0.257	0.000	0.734
12. 人と親しくなるのは好きではない。	-0.323	0.225	0.507
15. 人は全体的には信用できないと思う。	-0.114	0.220	0.457
18. 生涯つきあっていきたいと思うような友人はほとんどいない。	-0.173	0.372	0.555
因子寄与率 (%)	21.03	18.00	12.09
累積因子寄与率 (%)	21.03	39.03	51.12

回転後の因子負荷量(直交回転)バリマックス法

との相関を求めたが、いずれも有意な関連は認められなかった。

5. 内的ワーキングモデルのタイプ別にみた胎児および乳児への愛着

上記の因子分析によって抽出された3因子に対し、それぞれ各個人の因子得点を出力した。第1因子に対する因子得点が最も高い母親の集団を安定型、第2因子に対する因子得点が最も高い母親の集団を不安定型、第3因子に対する因子得点が最も高い母親の集団を回避型と命名し、内的ワーキングモデルのタイプとした。各タイプの人割合は安定型15名(28.3%)、不安定型17名(32.1%)、回避型21名(39.6%)であった。妊娠中に分類された3つのタイプ別に、胎児および乳児愛着得点の平均値の差を分散分析によって比較したところ、群間で胎児への愛着得点に有意差が認められ($F=5.451, p<0.001$) (図2, 3)、安定型の妊婦は回避型に比較し胎児

への愛着得点が有意に高いことがわかった。乳児への愛着得点は、安定型では他タイプに比較し高い傾向が認められたが有意ではなかった。

内的ワーキングモデルのタイプ別による胎児愛着得点と乳児愛着得点の相関係数は、安定型 $\gamma=0.924 (p<0.01)$ 、不安定型 $\gamma=0.656 (p<0.01)$ 、回避型 $\gamma=0.553 (p<0.01)$ であった(図4)。

IV. 考 察

1. 胎児および乳児への愛着

妊娠後期の胎児愛着得点と産後1ヶ月の乳児

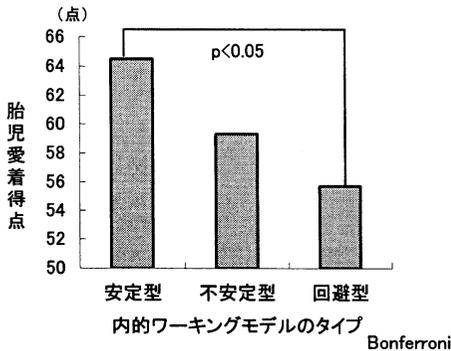


図2 妊娠期の内的ワーキングモデルのタイプ別、胎児愛着得点

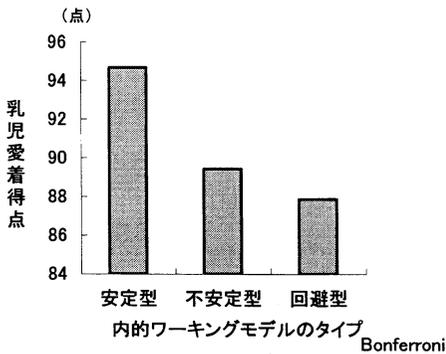


図3 妊娠期の内的ワーキングモデルのタイプ別、乳児愛着得点

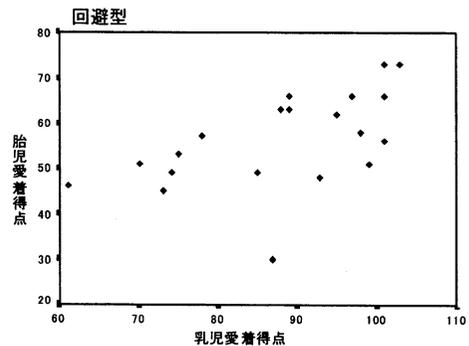
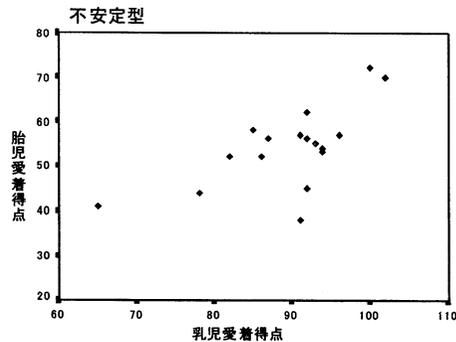
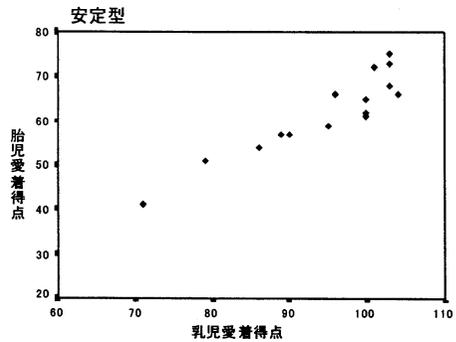


図4 内的ワーキングモデルのタイプ別、胎児愛着得点と乳児愛着得点の散布図

愛着得点との間に有意な正の相関が認められた。Müller(1996)は、ほぼ同時期PAIおよびMAIを用い中等度の相関($\gamma = 0.41$)を報告している。欧米に比べ妊娠期と産後で児に対する愛着の相関が高い理由として文化的影響が考えられるが、本調査と比較しMüllerの調査では、経産婦が大部分を占めている(93%)、未婚の産婦が含まれている(9%)、就業している母親が多い(89%)などの相違がある。これらの属性が妊娠期と産後での児への愛着の相関の程度に影響していることも考えられ、今後母親の属性別に胎児への愛着と乳児への愛着の関連を調査していく必要がある。

2. 周産期の母親の内的ワーキングモデル

周産期の母親の内的ワーキングモデルのタイプの割合は、安定型28.3%、不安定型32.1%、回避型39.6%であった。これはFonagyら(1991)の分類(それぞれ61.5%、22.9%、15.6%)と比較すると異なった割合であった。Fonagyの調査は構成的面接法(アダルトアタッチメントインタビュー; Main, 1985)によって内的ワーキングモデルのタイプが分類されていることに加え、対象者全員が初産婦であること、平均年齢が31歳と高いという点が異なる。このような対象の背景の違いが内的ワーキングモデルのタイプに影響するのか今後検討が必要である。またFonagyは妊娠、出産など自己の同一性が危機にさらされる状況下において、内的ワーキングモデルが一時的に変化する可能性、すなわち妊娠期のインタビューで過去の良好な愛着体験が誇張されたり、過度に理想化されて語られるため、誤って安定型として分類される妊婦の存在があることを指摘している。今回のような質問紙法では直感的に回答を求めると、面接法に比べ過去の愛着体験が誇張されたり、過度に理想化して語られるということは少なく、誤って安定型に分類されるという現象を予防できるのではないかと考えられる。さらにFonagyは調査時、対象者に「自分自身の幼少時の体験が次の世代の養育にどのような影響を持つかを知るための研究である」と教示しているが、本調査ではこのような世代間伝達の現象を知ることを目的とした

研究であるという説明は行っていない。このような教示の違いも回答者の心理に影響を与え、Fonagyの調査で安定型の母親の割合が多いのではないかと考えられる。本調査での内的ワーキングモデルのタイプ割合は日本人妊婦の特徴なのかあるいは測定法の問題であるのか今回の調査から結論づけることはできないが、周産期の母親の内的ワーキングモデルの実態とその測定法、さらに分類法については今後検討を要する点である。

3. 内的ワーキングモデルのタイプ別にみた胎児および乳児への愛着

内的ワーキングモデルのタイプ別に胎児および乳児への愛着得点を検討した。Bowlby(1988)は、安定した内的ワーキングモデルは、子どもが危機に類似援助を求めた時、愛着対象がいつも手の届くところにいて、一貫した、応答的、援助的なかかわりを繰り返すことに由来する。不安定な内的ワーキングモデルは、愛着対象へ接触や援助を求めた時に、一貫性のない、気まぐれな、予測のつかない応答を受けたこと、回避的な内的ワーキングモデルは子どもが世話を求めた時、援助的に応じてもらえず、逆に拒絶されるという経験の繰り返しに由来すると述べている。彼の理論に従えば、内的ワーキングモデルが安定した傾向にある妊婦ほど、幼少期に応答的、援助的なかかわりを多く体験したかも知れないこと、不安定な傾向にある妊婦は、幼少期に一貫性のないかわりを多く受けたかも知れないこと、回避的な傾向の強い妊婦は、幼少期に拒絶の体験を多く経験したかも知れないことが推測される。今回の調査で、妊娠期に安定型に分類された母親は、他タイプに比べ胎児愛着得点が有意に高かった。さらに妊娠期と産後の愛着にも強い相関を認めた。また回避型の母親は胎児への愛着得点が有意に低かった。Bowlbyの意見は、あくまでも理論上の仮説であり、本調査結果を一概に当てはめることはできないが、安定型に分類された妊婦は児への愛着得点が高く、さらに妊娠期と産後で愛着が経時的に安定していたことには、Bowlbyが述べるような背景があるかも知れないことが推測された。

Hazanら(1987)は、幼少期の愛着体験に由来したより一般的な自己や他者との関係性についての認識として、現在の内的ワーキングモデルを調査している。これは周産期の母親を対象としたものではないが、本調査で用いた内的ワーキングモデル尺度の起源となった尺度を用いた調査であり、各タイプに分類された人の特徴が述べられている。彼らによると内的ワーキングモデルが安定型に分類される人は、自分にとっての重要他者を信頼に値すると認知する傾向があり、他者とたやすく親しくなれ、相互依存関係に満足し、彼らの恋愛関係は肯定的な感情や高いレベルの人間のかかわりあい、信頼、情緒的満足によって特徴づけられる。不安定型として分類される人は、自信に欠け、自分是人から正當に評価されないと考えており、他者やパートナーは自分と親しくするのを嫌がっていたり、自分のことを見捨てるのではないかという思いにとらわれやすい。また彼らの対人関係は否定的な感情やレベルの低い相互依存によって特徴づけられる。回避型に分類される人は、自分にとっての重要他者を完全には信頼しがたく、必要以上に近づかれることを嫌う傾向があり、彼らの関係性は否定的な感情や、相互依存・信頼・人間のかかわりあい・情緒的満足のレベルの低さによって特徴づけられる。さらにこのタイプは自分の母親を冷たく、拒絶的であったと想起すると述べられている。

また、詫摩ら(1988)によると安定型の人は、自分の母親に対して「安心できる」、「落ち着いた」、「尊敬できる」などいずれもポジティブなイメージを持ちやすく、不安定型の人は母親を「うるさい」、「押しつけがましい」等の干渉的なイメージ、回避型の人は「あてにならない」「信頼できない」など不信感を示しやすいことも指摘されている。Hazanや詫摩の調査はいずれも成人を対象としたものであり、これを一概に周産期の母親にあてはめることはできないが、母親イメージは自分自身の子育て観にも大きな影響を与えることが予想され、周産期の母親がもつ自分の母親へのイメージと内的ワーキングモデルとの関連なども今後、探っていく必要がある。

今回の調査は母親の内的ワーキングモデルと

児に対する愛着得点という一方向からの検討であるが、Fonagyら(1991)は、初産婦100名を対象に、妊娠後期にアダルトアタッチメントインタビュー、出産後1年にストレンジシチュエーション法を行い、母親の内的ワーキングモデルと乳児の愛着行動パターンとの関連を調査している。これによると、妊娠期のインタビューで安定型(自律型)に分類された母親の乳児は75%が安定型に、不安定型(抑圧型)あるいは回避型(没頭型)に分類された母親の乳児は73%が回避型に分類された。またこれらを安定/不安定の2群に分類した場合、母親と乳児の愛着タイプの世代間一致率は75%($Kappa = 0.48, p < 0.001$)であったと報告している。文化背景や内的ワーキングモデルの測定方法も異なり、一概に比較することはできないが、今回安定型に分類された母親の愛着得点の高さと経時的な一貫性が、児とのかかわりに好ましい影響を与えることは十分に予測される。さらにこのような母親の子どもが将来、安定した内的ワーキングモデルを形成する可能性も期待できる。すなわちFonagyらの縦断研究の一時期を支持するものと考えられる。

妊娠期に児への愛着を測定する有用性は、最終的にはそれに引き続く母性行動を予測する力にある(Mercer, 1993)。PAI-J得点とMAI-J得点の相関は $\gamma = 0.684$ であったが、これに内的ワーキングモデルの概念を加え、安定型の妊婦に限定すると、その相関は $\gamma = 0.924$ にまで上昇した。これは、周産期の愛着研究に母親の内的ワーキングモデルの概念を取り入れることの重要性を示しているものと考えられる。

6. 研究の限界と課題

周産期の母親の内的ワーキングモデルを測定する試みはこれまで、構成的面接法によって行われ、タイプ分けも一定の判断基準に従って面接者の技量によって行われてきた。この方法は広く用いられてきたが、面接者の訓練を必要とし、また被験者にも時間的な負担や場合によっては過去を語ることへの心理的葛藤が伴うケースもある。今回詫摩らによる質問紙を用いることによって、内的ワーキングモデルを簡便に測定、タイプ分けすることができた。しかしこの

尺度はこれまで主に青年期を対象に用いられてきたものであり、本調査結果を一般化するには限界がある。今後面接法などとも併用し、周産期の内的ワーキングモデルと個人背景に質的な分析を加えていく必要がある。

また本来、内的ワーキングモデルが関与しているであろうと仮定されている世代間伝達とは、親の愛着パターンとその子どもが形成した愛着パターンとの一致を述べたものであり、この点に関して、今回対象となった母親が今後どのような母子関係を築いていくのか、また将来その子ども達がどのような愛着行動、内的ワーキングモデルを形成していくのか、長期的、相方向的な調査が必要である。

謝 辞

本研究をまとめるにあたりご協力をいただきました、倉敷成人病センター、産婦人科外来スタッフの皆様、ならびに快く調査に応じて下さいましたお母様方に深謝いたします。

なお本稿は岡山県立大学大学院へ修士論文として提出したものの一部に加筆、修正を加えたものである。

引用文献

- Bowlby, J.,(1973), 黒田実郎他訳(1977): 母子関係の理論Ⅱ, 分離不安, 岩崎学術出版社, 東京, 224.
- Bowlby, J.,(1988), 二木武監訳(1993): 母と子のアタッチメント 心の安全基地, 医歯薬出版株式会社, 東京.
- Dodge, K.A., Bates, J.E., et al. (1990) : Mechanisms in the Cycle of Violence. *Science*, **250**, 1678-1683.
- Fonagy, P., Steele, H. (1991) : Maternal representations of attachment during pregnancy predict the organization of infant-mother attachment at one year of age. *Child Development*, **62**, 891-905.
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987) : Romantic love conceptualized as an attachment process.

Journal of Personality and Social Psychology, **52**, 511-524.

- Main, M., Kaplan, N. & Cassidy, J. (1985) : Security in infancy, childhood and Adulthood: A move to the level of representation. In I. Bretherton & E. Waters (Eds.), *Growing Point of Attachment Theory and Research, Monographs of the Society for Research in Child Development* **50** (1-2). Serial No. 209.
- Mercer, R.T. (1993) : The development of the prenatal attachment inventory. Commentary by Mecer. *Western Journal of Nursing Research*, **15**, 211-214.
- Müller, M.E. (1993) : The development of the prenatal attachment inventory. *Western Journal of Nursing Research*, **15**, 199-215.
- Müller, M.E. (1994) : A questionnaire to measure mother to infant attachment. *Journal of Nursing Measurement*, **2**, 129-141.
- Müller, M.E. (1996) : Prenatal and Postnatal Attachment : A Modest Correlation, *JOGNN*, **25** (2), 161-166.
- 成田伸・前原澄子(1993): 母親の胎児への愛着形成に関する研究, 日本看護科学会誌, **13** (2), 1-9.
- 大日向雅美(1988): 母性の研究, 川島書店.
- Rubin, R. (1984) : 新道幸恵・後藤桂子訳(1997), 母性論 母性の主観的体験, 医学書院, 東京.
- 田野稔郎(1996): 母親の生育歴と育児態度について一児童虐待予防について, 平成8年度厚生省心身障害研究, 効果的な親子のメンタルケアに関する研究, 52-60.
- 詫摩武俊・戸田弘二(1988): 愛着理論から見た青年の対人態度一成人版 愛着スタイル尺度の試み一, 東京都立大学人文学報, 第196号, 1-16.
- 戸田弘二(1991): Internal Working Models 研究の展望. 北海道大学教育学部紀要, **55**, 133-143.